

米国



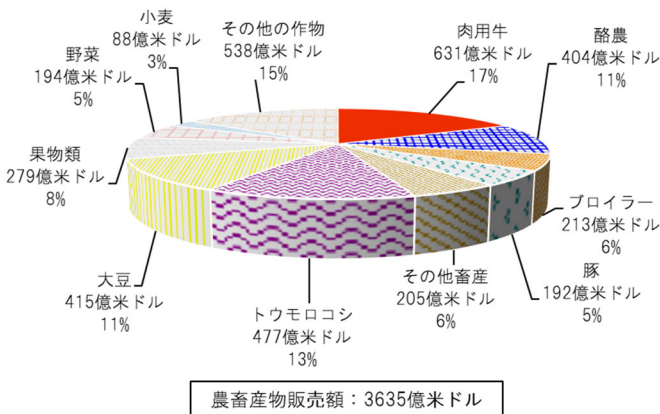
1 農・畜産業の概況

米国経済における農業の位置付けは、他産業の発展に伴い低下傾向にあり、2020年のGDPに占める農業生産の割合は4.2%と前年並みとなった。

20年の農業経営体数(農畜産物の年間販売額1000米ドル以上)は、前年比0.2%減の201万9000戸、農用地面積は同0.1%減の8億9660万エーカー(3億6284万ヘクタール)となった。1経営体当たりの農用地面積は、前年同の444エーカー(180ヘクタール)であった。なお、年間10万米ドル以上の農畜産物販売実績のある経営体は全体の18.5%で、全農用地面積の69.8%を占めた。

20年の農畜産物販売額(現金収入。自家消費分を除く)は、3635億米ドルと前年を1.0%下回った(図1)。

図1 農畜産物販売額(2020年)

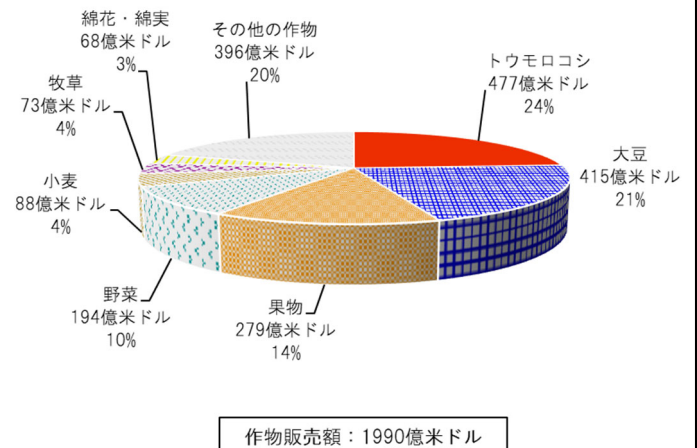


資料：USDA「Farm Income and Wealth Statistics」

部門別に見ると、作物部門は同3.9%増の1990億米ドルとなった(図2)。このうち、生産量の約4割が家畜飼料に仕向けられるトウモロコシは、477億米ドル(作物部門に占める割合は23.9%)と最大を占めた。次いで、大豆が415億米ドル(同20.8%)、果物が279億米ドル(同14.0%)、野菜が194億米ドル(同9.7%)となった。

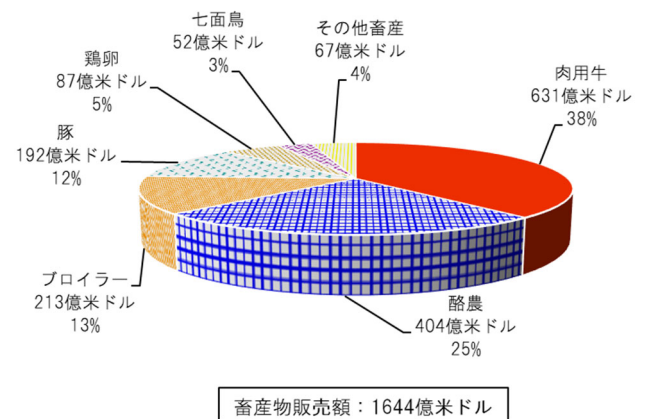
畜産部門は、同6.4%減の1644億米ドル(農畜産物販売額に占める割合は45.2%)となった(図3)。この内訳を見ると、肉用牛が631億米ドルと畜産部門の38.4%を占めた。次いで、酪農が404億米ドル(畜産部門に占める割合は24.6%)、プロイラーが213億米ドル(同12.9%)、豚が192億米ドル(同11.7%)となった。

図2 作物販売額(2020年)



資料：USDA「Farm Income and Wealth Statistics」

図3 畜産物販売額(2020年)



資料：USDA「Farm Income and Wealth Statistics」

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

米国は、年間1億トン近くの生乳を生産する世界最大級の酪農国である。しかし、国内に巨大な消費市場を抱えていることなどから、国際乳製品市場での米国の位置付けは、さほど高いものとはなっていない。

① 主要な政策

2018年農業法下での酪農の主な制度には、連邦生乳マーケティング・オーダー制度（FMMO）、酪農マージン保証プログラム（DMC）、牛乳寄贈プログラム（MDP）がある。

FMMOは、オーダー（生乳取引地域）内で取引される生乳について、飲用向け1分類と加工向け3分類の計4分類の用途に分け、それぞれの最低取引価格を設定するとともに、生乳取扱業者に対して、生産者へのプール乳価（用途別乳価を加重平均した乳価）支払いを義務付けている。これにより、生産者に対して安定的な収入の確保を可能とするとともに、消費者に対して合理的な価格で牛乳・乳製品を供給することを目的としている。2000年1月からは、①オーダー数の再編統合（当初の31地域が段階的に統合され、04年4月から10地域に）②生乳の用途区分の再分類（3区分から4区分に）③最低取引価格の設定に当たり、従来の基礎公式価格（BFP）に代えて、多成分価格形成システムに基づく新基礎価格の導入—などの変更が加えられた。

DMCは、2018年農業法で、酪農マージン保護プログラム（MPP）に代わる生産者のセーフティネットとして創設された制度である。DMCはMPPと同様、補填の指標に飼料費を加味し、乳価と飼料費の差を生産者の収益（マージン）とし、掛け率に応じて補償することにより、再生産を確保することを目的としている。なお、DMCでは、補填の発動条件の緩和などセーフティネットとしての機能が改善されている。

また、MDPは、2018年農業法で従前の乳製品寄贈プログラム（DPDP）の代わりとして創設された制度である。これは、生産者や加工業者などが低所得者層

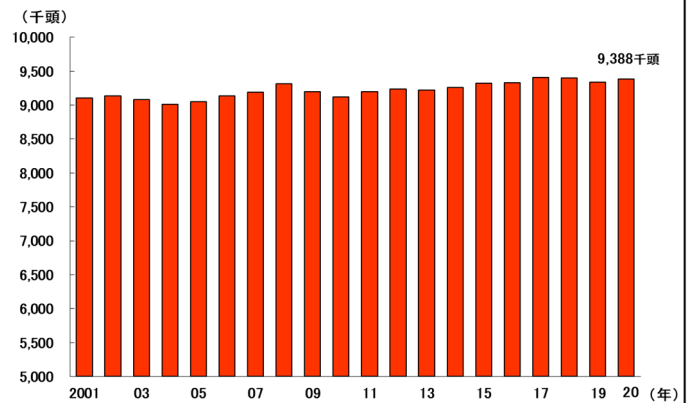
への食料支援として牛乳を公共団体などに寄贈するものであり、発生した費用は政府から払い戻しを受けるという、DPDPをより簡易化した制度となっている。

② 生乳の生産動向

ア 飼養頭数

搾乳牛飼養頭数は、1980年代中ごろから一貫して減少傾向で推移してきたが、99年に下げ止まった後は、小幅な増減を繰り返している。2020年の搾乳牛飼養頭数は、前年比0.5%増の938万8000頭となった（図4）。

図4 乳用経産牛飼養頭数の推移



資料：USDA「Milk Production, Disposition, and Income」

イ 生産量

2020年の生乳生産量は、搾乳牛頭数が前年比0.5%増となったことや、1頭当たり乳量の増加により、1億125万トン（前年比2.2%増）とわずかに増加し、11年連続で前年を上回った（表1）。

表1 生乳・乳製品の生産量の推移

(単位：千トン)

区分/年	2016	17	18	19	20
生乳	96,366	97,761	98,690	99,056	101,250
バター	834	838	893	905	973
脱脂粉乳	795	832	806	840	885
チーズ	5,525	5,733	5,914	5,959	6,005

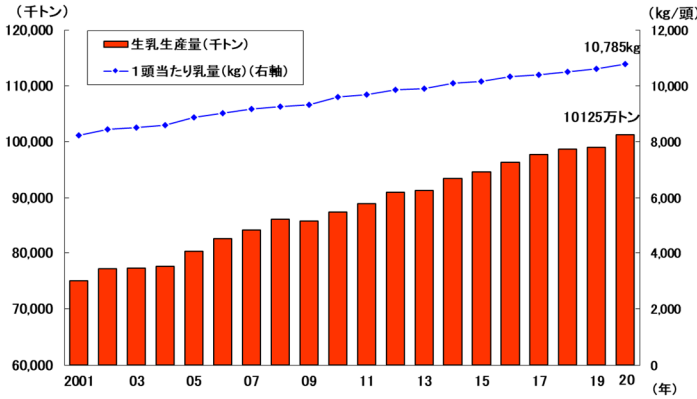
資料：USDA「Milk Production」、「Dairy Products」

注：チーズはカッテージチーズを除く。

ウ 搾乳牛1頭当たり乳量

搾乳牛1頭当たり乳量は、遺伝的改良などにより増加傾向で推移しており、2020年は、1万785キログラム(前年比1.6%増)とわずかに増加した(図5)。

図5 生乳生産量と1頭当たり乳量の推移



資料:USDA「Milk Production, Disposition and Income」

エ 地域別生産動向

生乳生産量の5割強は上位5州(カリフォルニア、ウィスコンシン、ニューヨーク、アイダホ、テキサス)で占められており、上位10州(上位5州にミシガン、ペンシルベニア、ミネソタ、ニューメキシコ、ワシントンを加える)で見ると、全体の約7割を占めている。

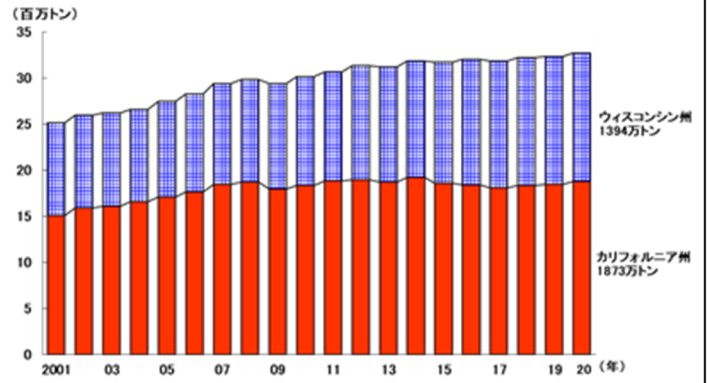
一部の州では、移民を主体とした安価な労働力を活用した大規模化が進んでいる。その代表であるカリフォルニア州は、1993年にウィスコンシン州を抜いて国内最大の生乳生産州となった以降も増加基調で推移してきた。

カリフォルニア州については、2009年に、前年終盤の輸出価格の暴落を受けて1792万トン(前年比4.1%減)へ減少した(図6)。その後は増減を繰り返しながらも1800万~1900万トン程度で推移しており、2020年は1872万5000トン(同1.7%増)となった。また、生乳生産量第2位のウィスコンシン州は、20年に1393万9000トン(同0.5%増)とわずかに増加した。



写真1 酪農家での乳牛飼養の様子

図6 カリフォルニア州およびウィスコンシン州の生乳生産量の推移



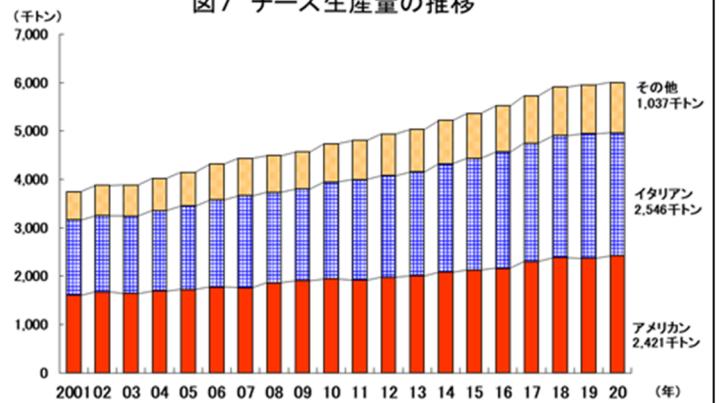
資料:USDA「Milk Production, Disposition and Income」

③ 牛乳・乳製品の需給動向

ア 生産動向

2020年のチーズの生産量(カッテージチーズを除く)は、前年比0.8%増の600万5400トンとなった(図7)。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が拡大する中でも、生産量は過去20年以上にわたって増加基調で推移している。このうち、チェダーチーズを中心とするアメリカンタイプ^(注1)は、242万1000トン(同2.0%増)、モッツアレラチーズなどイタリアンタイプ^(注2)は、254万6000トン(同1.0%減)となった。

図7 チーズ生産量の推移



資料:USDA「Dairy Products」

同年のチーズ生産量に占める種類別の割合は、アメリカンタイプが40.3%(同2.0ポイント増)、イタリアンタイプが42.4%(同1.0ポイント減)となった。

また、バター生産量は97万3000トン(同7.6%増)となり、脱脂粉乳の生産量は86万トン(同5.4%増)となった。なお、バターおよび脱脂粉乳ともにカリフォルニア州が最大の生産州であり、全米の31%、39%

をそれぞれ生産している。

(注1) アメリカンタイプには、チェダー、コルビー、モントレージャックなどを含む。

(注2) イタリアンタイプには、モッツアレラ、パルメザン、プロヴォローネ、リコッタ、ロマーリオなどを含む。

イ 消費動向

年間1人当たり飲用乳消費量(製品ベース、以下同じ)は、植物を原料とした飲料など多種多様な飲料との競合により、近年減少傾向で推移していたが、2020年は64.0キログラム(前年比0.0%増)となった。飲用乳については、乳脂肪が必ずしも体に悪影響を及ぼすものではないとの認識が広まっていることなどから、低脂肪牛乳や無脂肪牛乳など低脂肪タイプの消費量が減少する一方、以前は米国では少なかった全脂牛乳(いわゆる普通の牛乳)の消費が伸びている。

1人当たり年間チーズ消費量(カッテージチーズを除く)は、近年、増加傾向で推移していたが、20年はCOVID-19拡大の影響により17.3キログラム(同0.6%減)となった。一方、1人当たり年間バター消費量は2.9キログラム(同2.3%増)となった。

④ 牛乳乳製品の価格動向

ア 生乳価格

2020年の生乳の生産者販売価格は、COVID-19の拡大による国内外の乳製品需要の低下などから、100ポンド当たり18.1米ドル(前年比3.2%減)とやや低下した(表2)。

表2 生乳の生産者販売価格

(単位:米ドル/百ポンド)

区分/年	2016	17	18	19	20
生乳平均価格	16.30	17.70	16.30	18.70	18.10

資料:USDA「Agricultural Price」

イ 乳製品の卸売価格

2020年の乳製品の卸売価格は、コロナ禍で米国内の需要が伸び悩む中、在庫量の増加などにより、バターが1ポンド当たり157.8セント(同29.2%安)、脱脂粉乳が同105.6セント(同0.0%高)、チェダーチーズが229.1セント(同11.2%高)となった(表3)。

表3 乳製品の卸売価格の推移

(単位:セント/ポンド)

区分/年	2016	17	18	19	20
バター	208.2	232.8	225.0	223.0	157.8
脱脂粉乳	83.4	85.6	80.5	105.6	105.6
チェダーチーズ	187.4	190.3	183.6	206.0	229.1

資料:USDA「Dairy Market News」

注1:バターはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格(グレードAA)。

注2:脱脂粉乳は西部のFOB価格。

注3:チーズはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格。

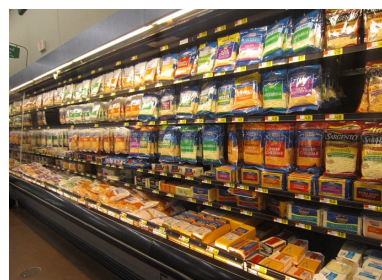


写真2 小売店でのチーズの陳列風景

(2) 肉牛・牛肉産業

米国は、世界の牛肉生産量の約2割を占める最大の牛肉生産国であると同時に、世界最大の牛肉輸入国でもある。また、農畜産物販売額に占める肉用牛関係の割合は最大となっており、米国農業の中で最も重要な部門の一つである。

肉用子牛生産は、家族経営による生産・管理が行われる一方、肉用牛の肥育に関しては、大規模なフィードロットで効率的な穀物肥育が行われている。また、肉牛の処理・流通面では、大手パッカーによる寡占化が顕著となっている。

① 肉牛の生産動向

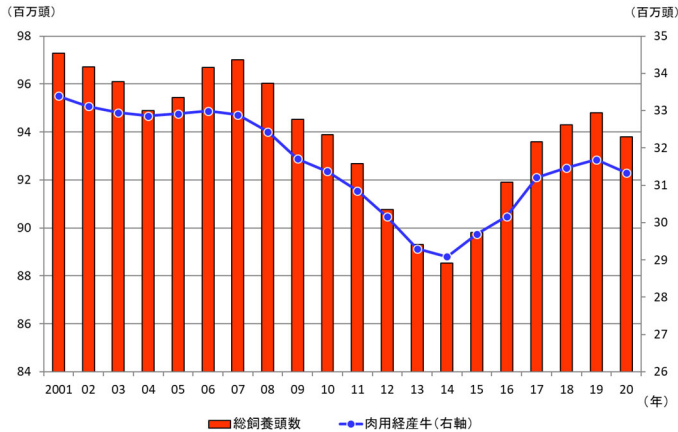
総飼養頭数は、2006年後半以降の飼料コスト高や11年以降の干ばつなどにより、肉用牛繁殖経営の収益性が悪化し、繁殖雌牛を中心に淘汰が進んだことから減少した。しかし、14年を底に草地の状態が改善され、牛群再構築が進展したことにより増加に転じた(図8)。

19年までこの傾向は継続したが、20年の総飼養頭数は干ばつによって繁殖雌牛の淘汰が進み、前年比1.1%減の9379万3300頭と減少した。

同年の飼養頭数の内訳を見ると、肉用経産牛は同1.1%減の3133万8900頭となった一方、500ポンド（約227キログラム）以上の肉用繁殖後継牛（未経産牛）は、580万8900頭（同1.3%減）と減少した。

また、同年の子牛生産頭数（乳用種を含む）は、同2.7%減の3508万5400頭となった。

図8 牛飼養頭数の推移



資料：USDA「Cattle」
注：各年1月1日現在。



写真3 フィードロットの風景

② 牛肉の需給動向

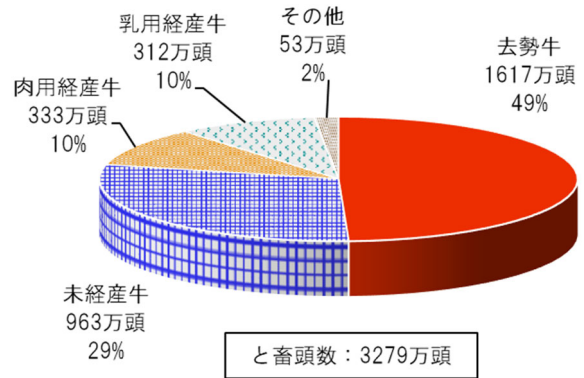
ア 生産動向

2020年の成牛と畜頭数は、前年比2.3%減の3278万5700頭となった（図9）。種類別では、去勢牛は同2.2%減、未経産牛は同3.3%減、乳用経産牛は同4.5%減とそれぞれ減少する中、肉用経産牛は同3.0%増と増えた。このほか、同年の子牛と畜頭数は、同22.2%減の45万6500頭となった。

一方、20年の成牛のと畜時平均生体重量（連邦政府検査ベース）は前年比2.2%増の624.1キログラム、平均枝肉重量（連邦政府検査ベース）は同2.6%

増の378.3キログラムとなった。

図9 種類別成牛と畜頭数（2020年）



資料：USDA「Livestock Slaughter」

と畜頭数は減ったものの、生体重量や平均枝肉重量が増えたことから、同年の牛肉生産量（枝肉重量ベース）は、同0.1%増の1232万5800トンとなった（表4）。

表4 牛肉需給（枝肉換算）の推移

（単位：千トン）

区分/年	2016	17	18	19	20
生産量	11,440	11,878	12,189	12,317	12,326
輸入量	1,366	1,358	1,360	1,387	1,515
輸出量	1,160	1,297	1,433	1,373	1,338
在庫量	343	294	300	291	325
消費量	11,643	12,017	12,140	12,372	12,500
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	25.2	25.9	26.0	26.2	26.4

資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

米国は、国内でトリミング（部分肉の成形過程で発生する脂肪分の多い肉）が大量に発生するため、赤身割合の高い牛肉（主に豪州産）を輸入しトリミングと合わせてひき肉を生産している。また、北部ではテーブルミート用としてカナダから輸入している。

20年の牛肉輸入量（枝肉重量ベース）は、前年比9.3%増の151万6000トンとなった。

輸入先別に見ると、カナダ産は8年ぶりに減少し37万4000トン（同2.6%減）、豪州産は2年ぶりの減少

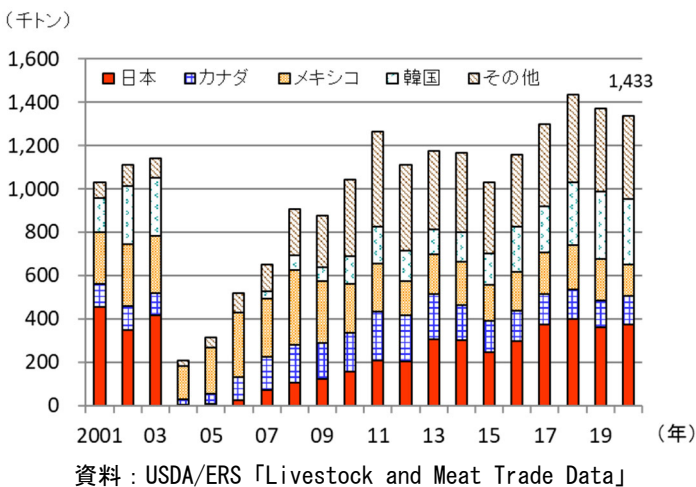
となる30万1000トン（同7.5%減）、メキシコ産は2年連続で増加し29万5000トン（同12.3%増）となった。

牛肉輸出量は、03年12月に米国内で初めてBSEが発生した影響を受け、04年に大幅に減少したが05年以降は回復・増加基調となった（図10）。

12年以降は、供給量の減少や価格の高騰などから伸び悩んでいたが、16年以降は好調な牛肉需要などを背景に増加傾向で推移した。20年は、COVID-19の拡大により輸出先の需要減や価格高などにより、同4.2%減の133万8000トンと2年連続で減少した。

輸出先別に見ると、最大の日本向けが37万5000トン（同3.5%増）と2年ぶりに増加した一方、第2位に浮上して5年目の韓国向けは31万2000トン（同2.5%減）、3位のメキシコ向けは14万5000トン（同24.7%減）と、輸出先上位の減少により、輸出量の減少につながった。

図10 牛肉の輸出量と輸出先の推移



ウ 消費動向

2020年の1人当たり年間牛肉消費量（小売重量ベース）は、前年比0.7%増の26.4キログラムとなり、5年連続で増加している。

③ 肉牛・牛肉の価格動向

ア 肥育もと牛価格

肥育もと牛価格（オクラホマシティー、600～650

ポンド）は、2014、15年が高値で推移していたものの、16年は、牛群再構築に伴う保留傾向が維持され、飼養頭数が増加したことなどから、前年比32.3%安と大幅に下回った（表5）。16年以降100ポンド当たり150米ドル台で推移していたが、20年は同5.1%安の同145.8米ドルとなった。

表5 生体牛と牛肉の価格の推移

（単位：米ドル/百ポンド）

区分/年	2016	17	18	19	20
肥育もと牛	153.4	155.8	159.2	153.7	145.8
肥育牛	120.9	121.9	117.1	117.1	107.7
牛肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	206.7	209.7	214.1	222.9	236.4
牛肉小売価格 (セント/ポンド)	596.3	590.8	592.4	604.3	653.6

資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook : Table」

注：カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 肥育牛価格

肥育牛価格（オマハ、1100～1300ポンド、去勢牛、チョイス級^(注3)）は、2014、15年が高値となったものの、16年に下落して以降おおむね横ばいで推移し、20年はCOVID-19の拡大に伴う処理場の処理能力低下の影響を受け過供給となり、同8.0%安の100ポンド当たり107.7米ドルとなった。

（注3）全8段階の肉質等級のうち、上から2番目の等級。

ウ 牛肉卸売価格

2020年の卸売価格（チョイス級、600～900ポンド、カットアウトバリュー）は、国内外の需要の高まりなどにより前年比6.1%高の100ポンド当たり236.4米ドルとなった。

エ 牛肉小売価格

2020年の平均牛肉小売価格（チョイス級）は、前年比8.2%高の1ポンド当たり653.6セントとなった。

(3) 養豚・豚肉産業

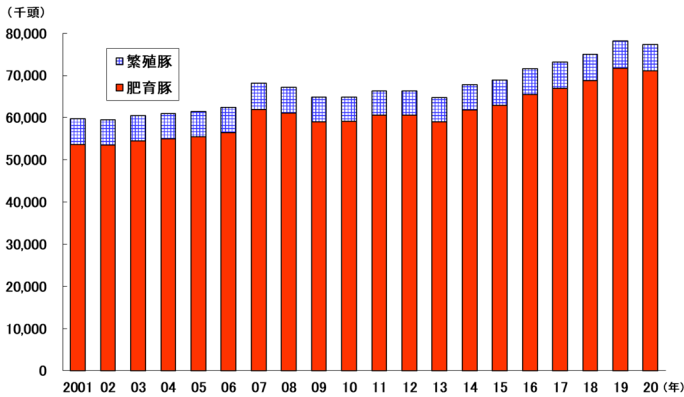
米国の養豚は、アイオワ州やイリノイ州を中心とするコーンベルト地帯を中心に、伝統的に穀物生産の副業として営まれてきた。一方、ノースカロライナ州やオクラホマ州でのインテグレーションの出現は、養豚産業に対して、生産・流通などの面で大きな変化をもたらした。近年は、各州で環境規制を強化する動きが見られ、大規模経営体による環境問題も顕在化している。

① 肉豚の生産動向

豚飼養頭数は、2010年以降はおおむね増加傾向で推移したものの、13年は豚流行性下痢（PED）の発生により落ち込んだ（図11）。その後、19年まで6年連続で増加したが、20年は前年比1.2%減の7731万2000頭と減少に転じた。

飼養頭数の内訳を見ると、繁殖豚は617万6000頭（同4.6%減）、肥育豚は7113万6000頭（同0.9%減）とそれぞれ減少した。

図11 繁殖豚頭数と肥育豚頭数の推移



資料：USDA 「Quarterly Hogs and Pigs」
注：各年12月1日現在。

20年（19年12月～20年11月）の子豚生産頭数は、一腹当たり産子数が11.03頭（同0.5%増）となったことから、1億4068万1000頭（同0.9%増）となった。



写真4 肉豚の飼養風景

② 豚肉の需給動向

ア 生産動向

2020年のと畜頭数（コマーシャルベース）は、飼養頭数の増加に伴い、1億3156万2900頭（前年比1.3%増）となり、豚肉生産量は1283万8100トン（同2.4%増）と過去最高を記録した（表6）。

また、20年のと畜時平均生体重量（連邦政府検査ベース）は131.1キログラム（同1.4%増）、平均枝肉重量（連邦政府検査ベース）は97.5キログラム（同0.9%増）となった。

表6 豚肉需給（枝肉換算）の推移

（単位：千トン）

区分/年	2016	17	18	19	20
生産量	11,313	11,605	11,936	12,536	12,838
輸入量	495	506	473	429	410
輸出量	2,376	2,555	2,666	2,867	3,302
在庫量	230	251	254	293	212
消費量	9,476	9,541	9,748	10,065	10,034
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	22.8	22.8	23.1	23.6	23.5

資料：USDA/ERS 「Livestock and Meat Trade Data」
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

2020年の豚肉の輸入量（枝肉重量ベース）は、豚肉生産量の増加などにより、41万トン（前年比4.3%減）となった。輸入先別に見ると、最大のカナダが25万9000トン（同0.8%減（総輸入量に占める割合は63.2%）、次いで多いポーランドは3万5000トン（同42.1%減（同8.6%））と大幅に減少した。

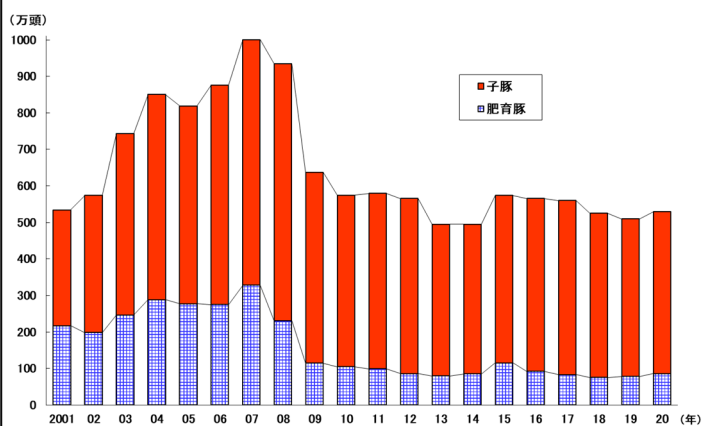
また、同年の生体豚の輸入は主に子豚であり、そのほぼ100%がカナダからである。同国からの輸入頭数は、米国内の豚飼養頭数の減少により、529万頭（同3.9%増）となった（図12）。

輸出量（枝肉重量ベース）は、13年にPEDによる減産で減少し、14年には増加に転じたが、15年には、主要通貨に対して米ドル高で推移したことから再び減少した。16年以降、生産量の増加や輸出先での好調な需要を背景に、再び増加に転じ、20年は前

年比15.2%増の330万1900トンとなった(図13)。

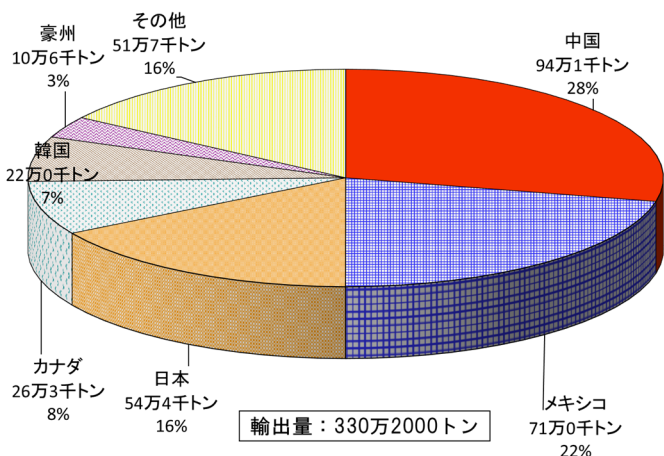
輸出先別に見ると、首位の中国向けは94万7000トン(同104.8%増)と、アフリカ豚熱の流行に伴う生産量の減少により大幅に増加した。メキシコ向けは71万5000トン(同0.4%増)、日本向けは54万4100トン(同4.4%増)、カナダ向けは26万3100トン(同4.6%増)、韓国向けは22万3000トン(同22.2%減)、豪州向けは10万6200トン(同23.7%減)となった。

図12 カナダからの生体豚輸入頭数の推移



資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

図13 豚肉の輸出相手国(2020年)



資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2020年の1人当たり年間豚肉消費量(小売重量ベース)は、23.5キログラム(前年比0.7%減)となった。COVID-19の拡大による食肉需要の減少に

より、消費が減少した。

③ 肥育豚・豚肉の価格動向

ア 肥育豚価格

肥育豚価格は、2014年には、PEDの影響による生産量の減少などにより大きく上昇したが、15年以降、アップダウンを繰り返している。20年は前年比10.0%安の100ポンド当たり43.2米ドルとなった(表7)。

表7 肥育豚と豚肉の価格の推移

(単位：米ドル/百ポンド)

区分/年	2016	17	18	19	20
肥育豚	46.1	50.5	45.9	48.0	43.2
豚肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	78.4	84.0	76.1	77.1	77.3
豚肉小売価格 (セント/ポンド)	374.7	378.4	374.5	384.3	402.9

資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook : Table」

注1：肥育豚価格は、全米の平均価格。

注2：カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 豚肉価格

2020年の豚肉卸売価格(カットアウトバリュー)は、同年4~5月の食肉加工場の稼働率の低下に伴う価格高騰の影響を受け、100ポンド当たり77.3米ドル(前年比0.2%高)と前年を上回った。

また、平均豚肉小売価格も1ポンド当たり402.9セント(同4.8%高)と前年を上回った。

(4) 養鶏・鶏肉産業

米国の養鶏産業は、飼料穀物の一大生産国という利点を生かし、生産から流通までの一貫したインテグレーションの進展により、極めて効率的な生産が行われている。また、国内では、消費者の健康志向からむね肉を中心として消費を大きく伸ばすと同時に、不需求部位のもも肉を中心に、鶏肉生産量の約2割を輸出している。

① ブロイラーのふ化羽数の動向

2020年のブロイラーふ化羽数は、COVID-19

が拡大する中、鶏肉卸売価格が低迷し、飼料穀物価格が比較的高値で推移したことなどから、前年比0.5%減の98億7169万3000羽となった。

② 鶏肉の需給動向

ア 生産動向

2020年のブロイラー生産量(可食処理ベース)は、処理羽数、1羽当たりの生体重量ともに増加したことから、前年比1.5%増の2022万2600トンとなった(表8)。1羽当たり平均重量(生体ベース)は、骨なしむね肉の需要増に伴うブロイラーの大型化などを背景に近年増加傾向にあり、20年は2.91キログラム(同1.4%増)となった。

表8 ブロイラー需給(可食処理ベース)の推移

(単位:千トン)

区分/年	2016	17	18	19	20
生産量	18,459	18,898	19,323	19,915	20,223
輸入量	59	57	63	59	66
輸出量	3,014	3,078	3,206	3,222	3,342
在庫量	353	388	383	425	376
消費量	15,332	15,639	15,978	16,498	16,779
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	40.8	41.3	42.0	43.1	43.7

資料: USDA「Livestock, Dairy and Poultry Outlook: Table」

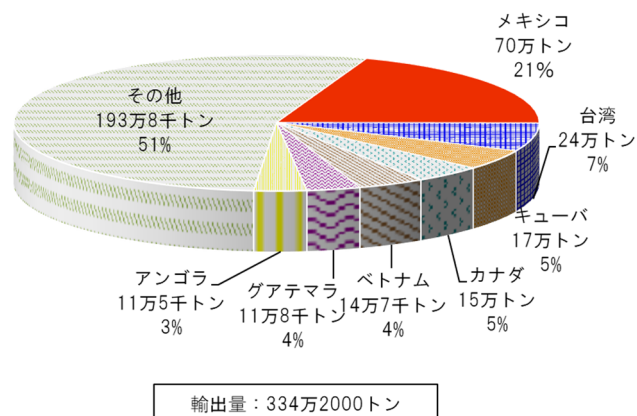
注: 1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出動向

2020年のブロイラーの輸出量(可食処理ベース)は、輸出先での好調な鶏肉需要を背景に、前年比3.7%増の334万2300トンとなった。また、15年の鳥インフルエンザ流行に伴う輸出先の禁輸措置からは回復傾向にあり、14年比では1.0%増となった。

主要国・地域別に見ると、メキシコ向けは同2.4%増、台湾向けは同7.2%増、キューバ向けは同22.5%減、カナダ向けは同15.2%増、ベトナム向けは同2.6%減となった(図14)。

図14 ブロイラーの輸出相手国(2020年)



資料: USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2020年の1人当たり年間鶏肉消費量(小売重量ベース)は、前年比1.8%増の43.7キログラムとなった。

③ ブロイラーの価格動向

ア ブロイラーの生産者販売価格

2020年のブロイラーの生産者販売価格は、卸売価格が前年を下回ったことなどから、前年比24.4%安の1ポンド当たり36.4セントとなった(表9)。

表9 ブロイラー価格の推移

(単位:セント/ポンド)

区分/年	2016	17	18	19	20
生産者販売価格 (生体)	48.6	54.6	56.9	48.2	36.4
卸売価格 (丸どり)	84.3	93.6	97.8	88.6	73.2
丸どり小売価格	146.4	147.2	149.7	149.5	143.3

資料: USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」

注: 卸売価格、丸どり(中抜き)の価格。

イ 鶏肉価格

(ア) 卸売価格

2020年のブロイラーの丸どり卸売価格(中抜き、12都市平均)は、前年比17.4%安の1ポンド当たり73.2セントとなった。なお、国内向けが主体となっているむね肉が同104.0セント(同1.6%安)、輸出向けが主体のもも肉は同49.4セント(同16.0%安)となった。

(イ) 小売価格

2020年のブローラーの丸どり小売価格(中抜き)は、前年比4.2%安の1ポンド当たり143.3セントとなった。

(5) 飼料穀物

米国は、世界最大の飼料穀物の生産・輸出国である。飼料穀物の主力であるトウモロコシは、世界の生産量および貿易量の4割程度を占めていることから、世界の需給動向に与える影響力は極めて大きい。

① 穀物の生産動向

2020/21年度(9月~翌8月)のトウモロコシ(サイレージ用を除く)の生産量は、収穫面積、単収ともに増加したことにより、141億1000万ブッシェル(3億5800万トン^(注4)) (前年度比3.6%増)と前年度をやや上回った(表10)。同年度の期末在庫は、前年度を大幅に下回る12億3500万ブッシェル(3100万トン)(同35.7%減)となった。

(注4) 1ブッシェルを25.4キログラムとして換算。

表10 トウモロコシ需給の推移

(単位:百万トン)

区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
生産量	385	371	364	346	358
国内消費量	314	314	310	309	307
うち飼料向け	139	135	138	150	142
輸出量	58	62	53	45	70
期末在庫量	58	54	56	49	31

資料: USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」



写真5 トウモロコシの収穫風景

② 穀物の輸出動向

2020/21年度のトウモロコシの輸出量は、27億4700万ブッシェル(7000万トン)(前年度比54.5%増)と大幅に増加した。このうち、最大の輸出先であるメキシコ向けは1560万トン(同7.7%増)とかなりの程度増加した。メキシコに次ぐ輸出先となった中国向けは、飼料向け需要が増加していることにより2147万トン(同9倍)と大幅に増加した。一方、日本向けは、1119万トン(同11.1%減)と前年よりかなり大きく増加した。

③ 穀物の価格動向

2020/21年度のトウモロコシの生産者販売価格は、1ブッシェル当たり4.53米ドル(前年度比27.2%高)となった(表11)。

表11 トウモロコシ価格の推移

(単位:米ドル/ブッシェル)

区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
生産者販売価格	3.36	3.36	3.61	3.56	4.53

資料: USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」